

## 江戸時代の消防事情⑥

元東京消防庁

消防博物館長 白井和雄

## ○ 火事がテーマの落語①

## 1 落語とは

落語とは大衆芸能の一種で、滑稽な話して聴衆を笑わせ、終わりに「落ち」を付ける話芸で、その演出法は、落語家が扇子と手拭を小道具に使って、C談や浪曲のような説明的な叙述を省略して、会話と動作によって咄を展開させる、日本独特の話芸のことをいう。

落語家の祖は、16世紀末の安土桃山時代、武将おとぎしゅうの側近にあって、咄の相手をした「御伽衆(またおはなししゅうは御咄衆という)」をその源としている。

落語を世の中に広めたのは、延宝・天明(1673～1684)の頃からで、京都で辻咄をはじめた「露の五郎兵衛」、同じ頃江戸で辻咄を始めた「鹿野武左衛門」、大阪で辻咄を始めた「米沢彦八」という「職業的落語家」3人であった。

落語には、「芝居噺」「音曲噺」「怪談噺」「人情噺」「三題噺」などがあり、「江戸落語」と「上方落語」に分かれる。

最後に落語全体の面白さをより効果的に結ぶことを、「さげ」といい、これには「考え落ち」「廻り落ち」「見立て落ち」「仕込み落ち」「仕草落ち」などがある。

数多くある落語のうちから、「火事を題材にした落語」を調べてみたところ、「お七の十」「富久」「二番煎じ」「道具屋」「味噌蔵」「火事息子」「粗



寄席の高座（春色三題噺）

忽の火事」「さんま火事」など、20近い落語があることが分った。そこで2回に分けて、これらの落語の「あらすじ」を紹介する。

## 2 火事を題材にした落語

## (1)「市助酒」

ア テーマ

この噺は、「火の用心」の夜廻りがテーマになっている。

この落語は東京ではあまり演じられていないが、上方では比較的ポピュラーな噺で、自分自身が酒飲みで、「一人酒盛り」など酒の噺を得意としていた、笑福亭松鶴の十八番。

イ あらすじ

町内の番小屋で、火の番の使い走りをしている

「市助」という男、これが飲んべいで、ある夜酒に酔って、火の用心の夜廻りをしていると、質屋である伊勢屋の店から灯が漏れていたのを、「風が強うございますから、火の用心を頼みます」と戸を叩いて声を掛けた。

これを聞いた番頭の藤兵衛は、「また酔っぱらってしょうがない奴だ、早く他へ行け」と追い払ってしまった。

これを聞いていた伊勢屋の主人は、「こんな寒おもてだない夜、本来ならば町内の表店から、代わる代わる奉公人を出して、夜廻りをしなければならぬ所を、市助にやってもらっているんだ。少しぐらい酔っていても、ちゃんと務めを果たしているじゃないか。寒い夜廻りでは酒でも飲まなければ、寒くてやっていられない仕事なんだから、労ってやらなければいけない」と番頭の藤兵衛を諭した。

諭された藤兵衛は翌日の夜、店の前を通り掛った「市助」を呼び入れ、無理に酒を飲ませた。初めは昨夜追い払われたことを気にしていた市助だったが、酒が入り酔が回ってきた市助は、「番頭さんは実にいい人だ。お店の台所にまで指図して火の用心に心掛けています。煙管も銀のいい物をもっていらっしゃる」と御世辞を並べて、「もう一杯、もう一杯」と杯を重ねて、すっかりいいご機嫌で番小屋へ帰っていった。

真夜中、見廻りの時間だと起された市助は、酔眼朦朧の体で、「火の用心」「火の用心」と叫びながら夜廻りを始めた。これを聞いた藤兵衛は、また酔ってやがる。小言の種を蒔かれないうちに、こっちから挨拶してやろうと、「ご苦労さん、我が家は火に気を付けているよ」と声を掛けると、「なあに、お宅様は焼けたってようございます」といわれ、番頭の藤兵衛が拍子抜けする。嘸。

## (2) 「王子の割間」

ア テーマ

甜問持ち(男芸者)的な男の生き方をテーマに、

「落ち」に火事が出てくる。嘸。桂文楽(8代目)の十八番。

イ あらすじ

旦那を取り巻いて、とうとう王子まで流れてきたので、「王子の蓄間」と異名が付いた野討間(特定の遊里に所属しないフリーの幣間)の平助は、呼ばれもしないのに花柳界は勿論、芝居や寄席の楽屋にまで平気で出入りするので、皆から鼻摘みになっている。

特に旦那の家には足繁く通っては物を強請り、有る事無い事人の噂話をするので、旦那や内儀は平助を毛嫌していた。

そこで旦那夫婦は二人で示し合わせて、平助を油断させて、悪口を言わせてから旦那が現れ、こっぴどく痛め付けてやろうと話が纏まった。そうとは知らずやってきた平助、旦那が留守と聞くと調子に乗って、「実は旦那は、外神田の芸者に入れ揚げて、お内儀さんを追い出そうとしていますよ」と等と、内儀の気を引くようなことを言い並べた。

そこで内儀は、「今までそんな不実な人とは知らなかった。愛想が尽きたからお前、私と駆け落ちしてくれないか」と誘った。

平助は、「私なら、あんたには苦労はさせません」となどといって、取り敢えず身の廻りのものと、薬缶や七輪など台所用品を大風呂敷に包んでみたものの、重くてなかなか背負い出せない。

そこへ居留守を使っていた旦那が顔を出して、「この野郎、俺が居ねえと思ってとんでもねえこと言いやがった。この荷物は何んだ」「ご近所が火事なので手伝いに来ました」「馬鹿野郎、火事などどこにあるんだ」「火事があるまで待っています。」

落ちに「火事」という言葉が出てくる。嘸。

## (3) 「火事息子」

ア テーマ

大店のひとり息子は火事が大好きで、親の反対を押し切って、町火消になってしまった。

両親は息子を勘当したものの、息子のことを思

う日々が続いた。或る日息子の活躍で、両親の家の近くの火事が無事消し止められ、これを機に息子の勘当を解くという噺。

イ あらすじ

神田三河町の伊勢屋という質屋の一人息子、寝ても醒めてもなりたいたのが火消。許されないのでグレて道楽の限りを尽し、あげくの果てに勘当されてしまう。勘当したものの、俵のことが頭から離れない両親。

そうこうするうちに両親の家の近くで火事が起こり、質屋の土蔵に火が入りそうになった時、一人の若い火消が屋根伝いに飛んで来て、土蔵の扉の隙間に土を塗り付けて延焼を防いでくれた。

喜んだ両親はお礼を言って、ひょいと若い火消の顔を見ると、なんと3年前に勘当した実の息子だった。"火事と葬式に行けば勘当も許される"の諺の通りで、母親は涙を零して喜び、「お父さん、法被一つでは寒いから、着物をやりましょう、紋付の羽織と袴を揃えて」、「なんだ婆さん、そんなナリをさせてどうする気だ」「だって俵が無事に帰って来てくれたのも、火事のお陰だから、これから火元にお礼にやります。」という、人情噺。

#### (4) 「二番煎じ」

ア テーマ

冬の寒い夜町内の旦那衆が、火の用心のため町内を巡回し、寒さを癒すため自身番小屋で、酒を飲んでいた所を見廻り役に見付き、いろいろと言い訳をしている内に、見廻り役の誘導尋問に嵌

り込んでいく過程が面白い噺。

イ あらすじ

町内の旦那衆が、火の番の夜廻りをするこゝとなり、2組交替で廻りはじめたが、寒さで拍子木を持つ手はかじかみ、火の用心と叫んでもいい声が出ない。

そこで風邪薬と称して、酒やら猪鍋を番小屋に持ち込んで、寒さ凌ぎをしているところへ、見廻りの役人がやってきた。戸の外から"番・番"と呼ばれるのを、犬が吠えているものと思い、"シッ・シッ"と追いかけておおうとした。

やがて役人の声と分って一同慌てて、酒や鍋を股倉に隠したが、匂いで見付かってしまった。"それは何だ""へい風邪のための煎じ薬と口直しで""ほう煎じ薬か。実は拙者も風邪を引いているが、役目柄病を押して廻っている。煎じ薬があるとは有難い、拙者も一杯飲ませてもらうからここに出せ"。

さて困ったが断る訳にはいかない。仕方なく茶碗に酒を注いで出すと、ぐいと飲み、"これはよい煎じ薬だ。ところで鍋のようなものが見えたが""へえ、口直しに""ならばその口直しを出せと、もう一杯、もう一杯と、酒も鍋もきれいに片付けられてしまった。"まことに申し訳ございませんが、もう煎じ薬はございません""なに、もうないか""へえございません""ないとならば仕方がない、それでは拙者もう一度廻ってくるから、二番を煎じておけ"という噺。